今世相鑒 十月部 一

# 改正月令博物筌

冬之部

## 十月部目錄

△印ハ俳偕の季をうつす物なり

○養生の法○雨風の考○米の豊凶○妙藥其外人家重宝の事ハ巻末に目錄ヨハまるべし

發端　冬の由來　冬の異名

十月　卦　月支　調子　陰陽生　異名

△立冬の節　三十　小雪の節ヨリ十五日ノ

十月月令　此部ハ十月日の定まる事支の定まる事と驚めるもの

朔日　△冬の旬　四十　△更衣　四十

朔日　衣服の式　四十　△拜墳　四十

朔日　進炉炭　四十　△燻糟食ふ　四十

朔日　炉開　燈炉會　炉開會　四十　△神送　△神の旅　△神の留守　五十

日支　△御玄猪　△玄猪餅　△支の子　△能數餅　五十

五日　△達磨忌　五十　△殘菊宴　六十

六日　△十夜　六十　大興寺　法花會　六十

十月目録

十日 △金毘羅祭 十ノ廿五
十日 △南都維摩會 十ノ廿六

十二日 △芭蕉忌 十ノ廿二
十三日 △御命講 △法花會式 十ノ廿二

中亥 △水宦解厄 十ノ廿二
十五日 △下元 十ノ廿二

中亥 △出雲大社神事 △神あつめ △神ありまつり 十ノ廿二

十六日 △京都聖一國師忌 十ノ廿一
廿日 △恵比須講 十ノ廿一

廿五日 △京法勝寺大乗會 十ノ廿
廿八日 △梅尾虫供養 十ノ廿

晦日 △神迎 十ノ廿

十月 月令

此部ハ日の定まらざる十月一ヶ月の事をあつむ

△御取越 十ノ廿
△茶の口切 △口切 十ノ廿

△巨燵明 △巨燵塞る 十ノ廿

十月 時令

此部ハ十月の時候にかゝる事をあつむ

△初冬 十ノ廿
△初霜 △霜柱 △霜の声 十ノ十九

△時雨 △初しぐれ △川音時雨 △袖しぐれ △小夜時雨 △村しぐれ △北しぐれ

△片しぐれ △涙しぐれ △夕しぐれ △松風しぐれ △落葉しぐれ 十ノ十九

△冬ざれ 十ノ十八
△木枯 十ノ十八

△初雪 △初雪たゆる △初雪の見参 十ノ十七
△初氷 △初氷解 十ノ十七

△冬ざれ 十ノ十七
△冬籠 十ノ十七

△冬構 十ノ十六
△閉北窓 十ノ十六

草木

此部ハ十月の草木を集めたるを

△名艸枯 △葛かるゝ △菊かるゝ △荻かるゝ △薄かるゝ △女郎花かるゝ △艸かるゝ 十ノ十五

△冬椿 十ノ十五
△早咲椿 十ノ十五

△残菊 十ノ十五
△冬牡丹 △寒牡丹 十ノ十五

△天竺花 十ノ十四
△冬菊 △寒菊 十ノ十四

△水仙花 十ノ十四
△八手花 十ノ十四

△茶の花 十ノ十四
△山茶花 十ノ十四

△歸花 △くるひ咲 △わすれ咲 十ノ十三
△寒梅 十ノ十三

△枇杷花 十ノ十三
△室の梅 △室咲 十ノ十三

△榧の花 十ノ十三
△散紅葉 △紅葉散る 十ノ十二

△麥蒔 十六
△拮柳 十七
△朱の葉 十七
△朽葉 十七
△大根 十七
△雪の下 十七

生類

爰ハ十月の鳥けだりの魚虫のゝいをあつめるに

△鶯子啼 十七

必用

此部ハ十月一ヶ月の天氣乃見ゆ其外必用の事とのも

破軍向方 十七
出行作事 十七
天氣 十七
養生 十七

生花式正

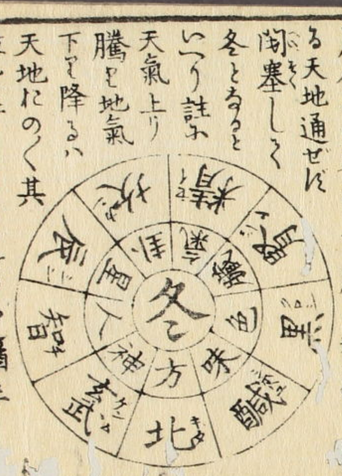
△料理献立 終

△枯蘆 十八
△落葉 十七
△木葉の雨 十七
△魚 十七
△冬木の櫻 十七
△柊の花 十七




# 月令博物考 冬の部發端

凡き内ゝ書くるハ冬の氣の旺ずる所ゝ月令ゝ曰天氣上り騰て地氣下り降る天地通ぜゞ閉塞しゝ冬となるといつゝ註ゝ天氣上り騰て地氣下て降るハ天地たのゝく其位を正しゝうもるをいつゝ猶妻ゝきゝけゝ爲主といつる所ゝまるゝ




**冬由來** 釋名小曰冬ハ終ゝ萬物終ゝ成る所以と有ゝれハ冬ゝハ一年の終ゝとよろゞの物成就もるといゝ事ゝ。和語ゝ曰冬をふゆと訓ぜしハゆもといゝ事ゝ五音相通ずるなり

**冬爲王** 方ハ北と易の統圖ゝ曰日冬ゝハ北方の黑道を行

これを北陸といふ。有よりて北を冬の方とする。味は鹹をつかさどる事は冬の氣は水に屬する由。海水の塩なるをもて味とする。色は黑しとは日令に天子玄堂の上に居り玄路によりて鐵驪に駕し玄旂を載黑衣をきると衣く玄堂は北の方の堂をいふ玄路は黑き車鐵驪は黑き馬旂は黑きはたの事也玄黑色を主とするをいふ臟は腎と人の五臟の内也腎は水を主どる臟なる由。冬は配當なる氣は精と腎精をいふ。卦は坎とは坎は水の象なる由。星は辰とは辰星北にあるなり。人は智とは腎は閉藏の官ぶ人の智惠をつくす臟なる由。智は冬に當る。神は玄武これも黑きゆゑを以て冬の神とするなり



## 冬異名

玄英。顓頊。玄冥。上天。清冬。三冬。九冬

和名。こるつゆ。えみつけ。きなつけ。

## 異名註

玄英とは爾雅に出て清英なりといふ。顓頊とは禮記に其帝は顓頊と有。玄冥は禮記に其神は玄冥と有。上天とは禮記に天氣上騰なる有をいふ。三冬は東方朔の疏に出る字にて冬三月の事をいふ。九冬は元帝纂要に冬を委冬九冬といふ。清冬は皮日休の詩に冬を清冬と作まり。こるつゆは霧の御鈔に出て雪氷なども露のこをるつゆといふなり。こふゆは露のこをるるものなれども冬と拾遺集に出て三冬をつきもしきぬれどとよみて漢土にも冬といふも同じ心也

哥秘蔵　きなつけ　小野峯雄

きなつけとなづむる末八月を長五月れ山ともめなくに

天木　為相

波ゆるき八月の南風ふくなれば日ぬそらぎぞのかげなき

俳　冬ものしをおしむ陰色をぞ支考

## 冬の朝の事

哥　蔵玉集

○冬の朝

ゆきとぞつ　ゆきおきてこそ見もそらに降よけるこのれ

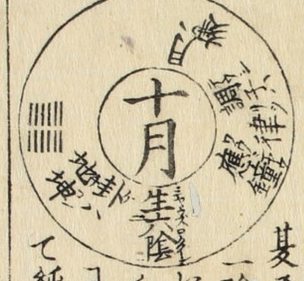
## 神無月

○冬を主る神と春の神を佐保姫といく秋を龍田姫といくいづれも童蒙抄より出す春秋八俳の季に見るゆえ也に委しく註ス統事記も神祇すべ零の気を主る造化の神なるなること

○右の外三季あること冬の部有



# 十月の部




△印之記ス分八季ごとの物ゝ

○調子八律よりして應鐘ともいへり八月の成長しるゝト禮記月令ニ出應陽ヨ應ぜるなり鐘八動くと心よりて萬物動きうごくゝ

○卦八地坤と八上の圖れでゝ極陰よりて地のうゝ

## 十月異名

○陽月　○良月　△五冬　△上冬　○開冬　○玄冬　○小春　△初冬　○泰正　△初春　△上春　△初春月　△小六月　△こと春

## 異名註

○陽月とハ此月一陽始めてきざすと云事歟

雅ニ出たり。良月ハ左傳ニ出たり十ニ數の満る事を良と云ふ。左傳の注ニ見えたり

○孟冬ハ月令ニ出はじめの冬と云ふ義ニ。上冬もはじめの冬と云ふ事ニ。開冬と云ふ顔延之の詩ニ作まり冬の事ニ。玄冬ハ纂要ニ出たり。これも纂要ニこれ

ニ出てはじめて冬ニ。秦正ハ歳時記出秦の世の正月ニおくる月と云ふ心ニ。小春ハ事文類聚ニ十月のごとくにして春のごときと云ふとあり

○上無と云ふハ陰陽の數ニより名てゐて十ニ上の數ニよつて七月ニ無と云ふ。神無月と云ふハ此月神々出雲国ニ集ゐ故名づく出雲ニて神有月と云ふ又一説に此月の異ニ上無と云ふより俗ニ訛つて神無月といふなり

○又真渕の説ニハ此月雷聲を出さゞる由ニ雷無月といふなり

○此月伊弉冊尊崩じ給ふ月ゆへ名づくと世間問答ニ出たり

○貝原氏の説ニハ卦ニなぞらへハ坤にして純陰ニあれハ陽未復陽なきの月ニ神ハ陽の司也此月陽なきの月由ニ神無月といふ諸神出雲ニあつまりゐなどいふなる跡ニうれなき事とあり其外説多し委しく日本歳時記に

ちなみに然さるる風雅の道ニハ此論ニ不拘神なき心をよむが風情あり

てなり次ニ證哥を出し作例と侯

哥　秘藏　神なり月　菅原忠音

よとやまかぜにたぐれるはなりおりの

志ぐれしぬるなき神なり月

哥　神なり月

玉雲ちる白松のまさきにかゝる月

神なり月とは何をいふまで

千載　神無月　道因法師

かしこ吹ひらめるねのゐなくしに
おくれ附ぬる神無月かな

新古今　神無月　高光

神無月風よ紅葉ふのちる附ハ
そこはうもなくぬるかすき

(俳)神無月夢鄲の口に本のまゝ野水

十月ハ小倦の不性見へ　おくう支考

神無月髪立へもさむいりの園十
過るんやたゝらまちの神無月支考

(哥)藏王　さゝれ月

ちりそてゝこのそ浦のしゝれ月
冬れそしめよ何をそあまし

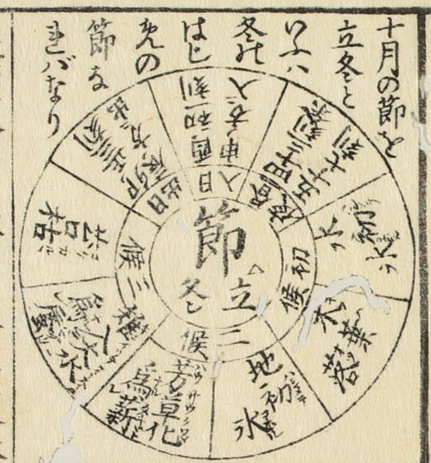
同　さゝれ月

さゝもかをと初霜月の紅ぼゝけ
なゞわも白きけさのさちうゝ

(俳)鶺鴒の尾さゝやすまる小春　后女
尾ぐもぬくもるふ本　小春ふ　人男

## 立冬

○節の名○七十二候　外水七十二候
左後長短○日の出入左に記次




十月の節と立冬と

○此頃水始て氷つゝ○木の葉落散つゝとゝ○地始て氷とハはじえに水が氷つゝてそれよりだんゝ地も いてるとして重ゝの芳艸爲薪と

よきふゝひの有し秋草もこれく
れしだにるをいと○雉入水爲蜃

月令の注に鼠ハ蛟のさゝひゝこれを
こぶりのもひてまのりのまろうる

とりふゝ心ゝとゝ○苦枯ハ草木ばうゝ
しおうゝ苦まゝ枯ることゝ事く

(哥)千載さまゝくのまゝ
ゝれねゆゝりまゝやゝ立てきねゝん

## 節の占候

立冬の日土ふるくんば来年麥貴　四月雨多さ

壬子なれば来年大ふ熱し節の日晴れ

来春雨多し北風あれば六畜ふをこひつ

## 小雪

。中の色。七十二候。末七十二候

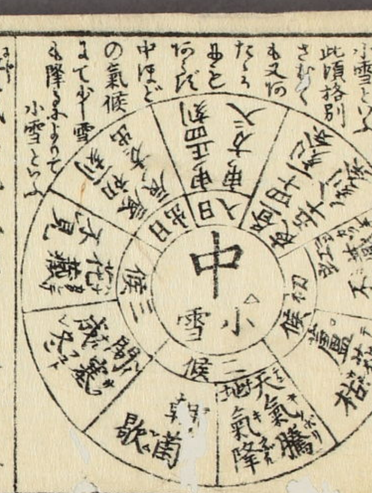
日出入。昼夜長短。左の記し

節より十六日めを小雪とす此頃格別さむく

もゝはなたらちるもの

中ほどの氣候

まて少雪も降るゆへ小雪とす




。虹藏不見ハ此頃より来三月まで

虹うつとなきをいふ。草枯ハ草枯

枯る。天氣騰地氣降とハ天の陽

氣去りて地の陰氣下る。寒氣

ぜんぐにりよふまく。朝菌晦を

ふくびくをせざる。閉塞成冬とハ

陽氣ふさがりて寒きき冬ことなる

なりの花藏不見ハ花ハ大抵陽氣

を得てひらくものゆへ陽氣なき

時なれば花それて不見なり

## 日令

此部ハ日の定まる事

并ハ支の定まる事を出す

朔。今日沐浴をし長寿よろ

日。今日房事を慎てつしむべし

朝　**壬夏の旬**　今日天子御装束を

日　改めて南殿に出

御なりて節會行ふ二敵の後

氷魚を群臣よりふ筆根元二出

(哥)元弘立后屏風

法皇の御代の夏とよろこを

大宮人はさ〻ふなりの

(非)物語　菖蒲の根　也有

朝　**更衣**　十月朔日ハ先づ御衣ぬ

日　掃部寮夏の御装束を

撤して冬のお改めなり。五皇南殿

へ出御ありて節會行ふ是を孟

冬の旬とらふ衣更とぱういふ（季四月）

（俳）諧ハ冬ハ袖と成ぬ更衣　李下

朔日　衣服の式　諸家今日より来年三月晦日迄冬礼袍を着せらるゝ紀事出

新日　拝墳　唐土にて今日貴賤ともに先祖の墳を拜し祭をい首原

説に本朝にても今日先祖を祭るべしといふ唐日本の祭やう委しく歳時記出

朔日　進爐炭　唐にハ今日有司爐に炭を奉ると事文類聚出

朔日　燈燈食　。峡人十月朔日多く燈を焚の人多く燈糟を食ひ或ハ糖と焉を事文類聚に出燈糟といふハ酒の滓のこかしたるやうなる物又燈糟の事を蒸裏もいふ蒸裏とハつゝそむとる物をいふ

朔日　爐開　△爐開會　今日炉を開き三月卅日炉をとぢぐ唐にて今日炉を開き炉中にて肉をいろぶり飲食ハ是をたんろ會といふ歳時雑記出

此例により本朝茶人些昔より炉を開き賓客と茶を喫ハ（詩）有歳時記出

神送　△神の旅　△神の留守　此日諸神出雲の大社（臨幸しろふ

△神出雲の大社（臨幸しろふといふ委しくハ日本歳時記に出さう面白き事ゝゝるべし

（俳）面白きかぶふ神のかつゝきの神ぬ祝添き流出ハ蘇寺

（狂）馬なくで風をハ神のかしま立　末の葉さハくなそひて行　長角

支日　御玄猪　△玄猪餅　△御厳重　△支の子　△触勢餅

昔ハ山猪を奉る事日本記等に出。應神天皇の御代より毎歳支の月支の日を祝ひ御玄猪の餅を奉るべき詔のりて攝州能勢郡木代村切畑村西村より貢ぐハ。餅を製衣もるる當家ハ能く清め赤小豆と餅米とよて餅とぐきくの花もえで

ちの〻の花菓とかいしきこれ色
うす赤しこれハ豕のすゑ肉紙
表しうゑ下學集ニ曰豕ハ妊
年十二子を生む閏年ハ十三子を
生む故ニ俗人これを視ること
されば童謡ハ子のりちハ親ゑ
子うめとりハ此故あるゝ十月亥の
日ハ餅をくへば無病長生なり 顯齡
其外委しく八歳時記拾遺ニ出す
女の祝ニけなど甚面白し見るべし

(哥)蜻蛉日記「万代をいとゝ山道の
いのとゝうり君ゝうるよまひまる」

(俳)秋ハ夜の面もさびつく麦ばく 立甫
今ハあけ〻史雄の上のもちゐ 時風

(狂)豚咎しまうよびれふきさうしが
さてもいのこの股れをごく 貞松

上巳 今日槐の実を食ハ四不成 今日房事
をすれバ百病を去る日 就日を慎べし

五日 △遠磨忌 遠磨ハ南天竺の人ゝ蠶の
巣ハ東てりろにてゝ

禪宗を弘む大和十九年十月五日
寂ニ委しく八博物筌ニ出す

(俳)禪房ハ遠磨忌ゝ怎ゝ抜俗者寛人
遠ニ怎ゝ抜ゝ李破

(狂)小夜衣のかぶりけるかけ
ゝをりかゝてさびさ寺うち 貞柳

△殘菊宴 延喜の御代ハ十月殘菊
の宴をもよほしたまふ

(哥)秋さけゝ菊よはあれと朴ニ月
附ゑ花のうこいうつける 貫之

(連)たまいの落葉も菊の白い 昌休

(俳)香ゝて垂ゝ菊ゝ嵐雪

(狂)秋をよゝ菊ゝ貞柳
むりしそうに菊の宴 秀貞

十夜 此月五日より十五日まで淨土宗
の諸寺ゝて食を勧むゝ

(俳)皮ニ紫の香こめ菊ゝ十夜ハ 白羽
いとゝ面ハ吉田ハ古田十夜ゝ麥里

(狂)ムンくゝとかゝたけど答ハきゝ
百万遍の法の伍ハ さ川 松子

六日 大和△興福寺法華會 一名山階会といふ九月晦日より十月六日まで妙法の大會をおこなふ也此大會八開院冬子の願公初めうゝ六とし冬嗣公父長岡大臣れ御忌日ゆゑ行はるゝよや

十日 讃州△金毘羅祭 讃州鵜足郡象頭山ゆ神代より御鎮座ある神く御神車八月晦日より初て十月十日終る今日象詣別して多し故ゆ李〻ゆ。金毘羅道中記といふる本あり此本八金毘羅象詣海陸の道中を委く記ゆ茶御利生縁記哥等まて委しくのゆ

十日 都△維摩會 南都興福寺ゆて吉より十六日迄行はる

哥 白川殿七百首 新大納言顯輔

神主月例ふりおける法法とて

ゆゑ此部にのるゆ乃ゆゑ

俳 紙屋ゆいねりの秋しのぶ 尾霜

十二日 成就△芭蕉忌 俗姓松尾氏初の名八半七後ゆ忠左衛門宗房と改俳諧を李吟ゆ學び桃青とゆ江戸深川の庵ゆ芭蕉一株を植うゆ是ゆよつて世の人芭蕉の翁とよびゆ尤俳偕中興の祖なり

十三日 △御命講 日蓮上人今日寂ゆ故ゆ法花宗寺院ゆおゆゝく御影供を修もるゝをみえくとゆゝ云俗ゆ御の字をそへておゆゝくといいるゆゝ

俳 頭ゆも花のもるとく金玉なる雨方

十五日 △下元 今日を下元といふゆ七月十五日中元の所ゆ

十五日 △水官解厄 今日水官人間ゆ降て人の[illegible]天帝ゆ

中支 出雲△大社神事 △神あつわゆ神ゆ出雲國杵築村ゆ

ゆゝ祭神大巳貴尊ゆ祭の當日前ゆ毎年風烈く被あゝき日ゆ

其日龍蛇藻よ乗て海上ふ浮
を取て曲物ふ盛て神殿ふ納む
いり其蛇蝮蛇よ似て銭形の斑
あり尾先ハ魚よ似くまくるし

十六日 京都聖一國師忌 東福寺ハ開山
建仁二年十月
十五日生まれ弘安三年今日寂に

(俳)通天の紅葉を見や用山忌 之白

十八日 此日雑初くなく時湯あ
もれば長寿無病なり

廿日 不成 ○今日遠方(西)く事を忌む
就日 ○天龍寺佛國国師の忌日

廿日 恵比須講 誓文拂・此日商家
一統おいそい日として我

を祭り酒宴を催して客をもまねく
中ふも呉服店ハ格別おきいしくする
事く商人つ祭ぐ欺賣の罪を拂ふ
とて誓文拂ともいく京おてハ官者社
よ詣で是を誓文ぐしの社とい大坂
わくハ今宮の戎(参詣多し

(俳)夷講卯妻に筏巻にそり 芭蕉

十月の廿日もうそを拾女うる 巴桃

廿五日 ○今日人の病をとく事なくん
○南禅寺の一山忌 行状ハ博物筌に
京法勝寺大乗會。應仁の頃寺絶
廿五日 さう今ハ本尊藥師佛東坂下西教寺ふ移

廿八日 不成 就日 櫻尾田供養 櫻尾寺明恵
上人の開基く

晦日 神迎 (俳)[illegible]

月令

日ふくくく十月一ケ月の
雑事をしるす

御取越 十月廿日親鸞上人御忌日
正當日よハ本願寺ふて報恩
講を修ハ一向宗の檀家ふ報恩講
を勧むるハ常日ふて勧る故名づく

茶の湯 ○口切 三月ふ茶を擂五六
月ハ壺ハ浩てあくご山へ
上し八九月ハ渚国(出ハ十月ふハ
茶入茶壺の口を開く故口切といふ

(俳)口切よ塵の庭ぞなげかしき　芭蕉
口切や袴のひざふ線　曲維蔦　其角
(狂)口切のまとをうあつぎて後むやし
むしくのたねしちもくむちや　芝屋

△巨燵明　こたつあけ。△しはつる。巨燵ばう
いへば三冬まいるなり

## 時令

此部は八十月の時候にかゝる事をあげむ

△初冬　十月三五日までをいふ又十月の異名ともいひ十月朔日一日は事をといふなり

(哥)夫木
ふきてはこよひ初夜いつのまに　隆源
かゝしく神のさくわくるかん

類題　初冬霰　範宗
ふるまよりみ山よりいろぐらん
正木のつゝはかまちるなり

家集　山家初冬　俊光
ふきぬこゝのきふをさそふ山風に
ちぐれがちなる庭ぞさびしき

(詞)冬はきふるまをふれぬ。冬は
初冬。はつしふきふ。冬の来て
。きの〻はにはきる風。水。こほりて
。冬をむかふる。今朝よりふゆと
。きのふを妹と。冬ふを西とや
。雪も雪とふる。みぞれちるれぬ

△初霜　安〻く冬の土十と記れ
(哥)冬来てもをぢもらぬ初霜の
をてはいろぐん風をよぐく　家衡
(連)初霜の花もかゝ〻重ねる　宗祇
(俳)初霜や取ふ綴の反ふり　支考
(狂)初霜のきゝるるとても朝食の
箸をおく向の祝ゆぞあけて　立甫

△時雨　△初時雨。志ぐれの初めて季に
なるまり。ぬれ時雨。志ぐれの初めて季に
なり。志ぐれ時雨。志ぐれの初ふ印
。時の雨とうく八月ふ〻くふるれ冬ちろ
時ぐはりくふ〻くふるの意ちろ
。初時雨と八十月ふなりとけめて

ふる雨はいつ秋のまつふる八秋のし
ぐれとうそ袖しぐれとハいそず。
霧雨とも小雨のそにてもうそし
ぐれまそあぞうくし

(題)拾遺　かきくもし附雨くもをまつ
なりひくそれかくもひの森　貫之

千載　稀あしと袖ふれんこのまろれ
木のそのたくるくる秋まれ附雨と　馬内侍

夫木　神無月程さくあるれ雲まよ
ひしくタ白られのそら　宗尊

碧玉　夜時雨
附雨を夜の枕とふしん

雪玉　山時雨
附雨つきくるは方はうき雲

同　鞘中時雨
しぬ秋のまくくふくくふ

柏玉　河時雨

附雨をかくもやもの村しれるふ

同　野時雨
附雨をの村しれ

古今　袖時雨　躬恒
神無月附雨をみちまをを
しい人のたりとをり

玉葉　松風時雨　憲實
山のもの雨をのこともの村れ

同　泪時雨　公顯
みち茶を秋のくくとふあても
れとふるハ泪なりなり

(同)川音の時雨　川音まれの時雨きはこるし　紬時雨
なぶの神ふ
小夜附雨　夜のしれく

村附雨　附雨をの村しれ

片附雨　一方それ　月附雨

△樣時雨　風まじりの時雨　△冬時雨　△松風時雨　△落葉時雨　なるしぐれ　しぐれよさくる

○しぐれをぞ。しぐれの糸。糸しぐれ

連　時雨も照日あわるしぐれる宗砌
雲はたゞうゆる世のしぐれ心　敬

俳　川もまれ時雨くくり出用丹　文考
初しぐれ猪も小義と庄ほーげん　芭蕉

## 志賀紀

時雨風の交りもとる之委しくハ
三冬の雪志賀紀の條おのゝ見べし

俳　さくら金指出さまぬ紀なし　闇指

## 木枯

△風と出。木枯一の風と傳り
秋や吹風まて木とうこがらし
分ハ秋をふまり俳よいをの季トス

俳　木枯の名ハ竹林ふ似くる心　芭蕉

哥　千載　紅ぶにしぐれさまにる木枯ふ
葉のまに風ぬりひとも　定頼

## 液雨

○唐聞中の俗立冬の後十日
を入液とす液とハ雨ほ水なり

## 初雪

△初雪のきゆる△初雪の見参
○昔ハ初雪降れハ花やかもれ
参内せしかしかもとれを見参とい之
○淺雪ハ同しく此外雪の名ハ三冬の部ふ出ル

哥　拾遺　景時
ふりやそよてめづらしと思る初雪ハ
ふり山ふりやそねーん

新古今　贈西上人
つひとうもこのもれ初ぞうつまるく
名ハ初ふりもの

詞　ふりもる。ひとふる。初雪発。つもる風
やぬ。ふりもりぬ。初雪ぬ。初めつ

連　初雪ふ屋ふのちりもはし　宗祇

俳　初雪にまんずり糸の妻山　其角
初雪やはちはひ屋ふ形ふる　[illegible]
初雪や限のしぐれ岩の上　淡々
めでたうなる糸内金の初雪見　如水
初雪や木地挽く谷の名胴　紹簾

詩　初雪詞
瓊林瑤樹忽珊々急帶西風下

・晩天(ハンテン)。タマノハヤレニタマノ木ガハヘタカトオモフホドオモヒガケナクキラ〳〵
スレバキウニ西風ニツレテハツユキガフツテキタノジヤ
・柳絮(リウジヨ)三冬ニ先(マヅ)北地ニ ヤナギノワタガ冬ノウチカラキタグ
ニハヤ ウチルカ ・梅花一夜遍南枝 ムメノハナガヒトヨサ
ノマニミナミノエダニサキソロウタカト オモヘバハツユキガフツタノデアツタ

△初氷(はつこほり) △初氷解(とけ)。氷のとけ要し
冬ニ十三日ニ云る

哥 千載 きゝのうへをおもひくれしらばいかにまにいる夜の水の落水をかん 公實

俳 行水の一夜にありや初氷 里隱
初氷を鉛ハ声門まゐる松乃風 韓悪

狂 まの絲底ふとみちの二三枝 むもとびをかゝる舩もかゞくの卯 貞史

△冬ざれ(ふゆざれ) 冬ざれハ冬のしあれはてたる心也 冬て物さびしきところにいふ

△冬籠(ふゆごもり) 冬ハ艸木ともに花葉落て精気地中にこもる是を冬ごもりといふ

又一説に冬になれバ家の内にこもりゐることをもいふ也季ハ三冬にしてよし

哥 雪ふれバ冬こもりせる草も木も春にしられぬ花ぞ咲ぬる 貫之
ひまもなくおなる紅葉ふむに埋まれて庭のけしきも冬籠りせり 崇徳院御製

俳 金屏の松の古びや冬籠 芭蕉
里ハ山城に方丈や冬ごもり 支考
隱しなごやま仙人も冬ごもり 野水
冬籠いらぬて見る木の芽小鶴十
冬籠り美女にも人にあはぬ〳〵 鳥行
冬籠り長寿何ぬ人とちり 西鶴

△冬構(ふゆがまへ) 冬ごうまへハ冬になりてまくをそろへ炉をひらくやうなる事をして寒さをふせぐ支度をする心也

俳 冬構谷のむかしのかまへ 白扇

△閉北窓(きたまどをとづる) 北風ハさけしきりのまへ 北風をよける支度之

草木

此部十月の艸木を集む冬と印るハ冬三月ともに景物に用ひてよし

名草枯 △葛うら △蘇うら △萩うら △蘭うら △女郎花うら △艸うら
御傘よ花の字結べバ秋くとゝり

(俳)女郎花ゆ艸もかゝ艸もあり 鬼貫
優ふうろちゝもたゞ蟲ゝ蔦ゝ枯れ 言水

冬椿 △早咲椿 椿の花ハ春く冬椿者を早椿と名て人賞之と云

残菊 九月咲のこりる菊ゝ

(哥)夫木 貫之

秋さける菊よハあれど神ゝ無月
しぐれよ花のえハ深けるゝ

(狂)一ゝせの花のかぎりを砂業れ
ゝ代の粒ゝど数ゝ多さよ 舊德

(詩)殘菊詞 唐大宗

細葉・月輕・羽・率團花飛・碎黃・還將今歲色復結後年芳

細カキ葉ガシボミナガラ青キイロアリハナノ
ミルク咲タルモミダレ飛デ黃色ニミユルナリ
コトシハコレカナゴリナレドモ又来年コノイロカ
ラモツテサケヨトゝ心ニチギル

(詩)殘菊五字對句 同上

闌珊陶令宅・晚彫霜凛冽・
サキミダレタルトウヱ シモガソヨクオイタ

寂莫費公房・曉逐露離披・
モノサビシイ費長房 明カタニデミレバツユガ
ハラくトオイテアル

冬牡丹 △寒牡丹 ○十月ごろ花さく 元政
十二月までもあり 大和本艸よ出くり

(哥)雪中牡丹
ゝくたゝくゝ八重つむ雪も沖くゝ
九重なくゝ紅と紅とゝそ見まき

(俳)重ね重ねても雪ゝ紀の牡丹一菊

(狂)さむさうな形りホ咲くる雪牡丹
花の風気とゝ山べくりゝと 來多峯

犬莖花 ○石蕗も書く(俳)ちり穴ホ
犬莖の花さく犬莖の花 右山

(狂)口なしの花よ咲しをいろすゝて
はハの花とハいとよゝ花ゝん 爲貞

冬菊 △寒菊 ○多く花八重ゝ葉
ゝりて赤を賞ス 雪見州

○秋無艸 同上○霜見艸 謨○のこり艸 藻塩
○初見艸 藏玉は出まうれども初見艸抽出の事こゝにいくつ説多し奥艸の事

(哥) 夫木　式子内親王

ゆくすゑきのうつろふやへのきくにまゝ
白きこうはだとうんぬるしら雪

藏玉　初見艸

玉ぐれゐる庭ふゝくしも初見草
花咲よりくりもわやゐらん

(連) 寒さ冷ぬ菊さく谷の南ゝ宗碩

(俳) 寒に折る天窓の上ふ菊の杖　嵐雪
後敵のつよくみすゆやその菊　梅翁
寒き菊やはのふ見ぬていきてゐり　五流

(狂) ふちてほ紅葉のゑハ色〳〵そふる
ゐるよおらるゝめん菊の花　嘉友

(詩) 寒菊七字對句　詩礎

顔色却因風露染　愁雪葉雪ヲイヤガル
英華不畏雪霜欺　傲霜枝シモニヱダヲスヱダ

水仙花 千葉あり 單葉あり 一重の物花白く花心黄ゝ

(俳) 水仙ふあの見ぬ床し陸子紙支考
ふ仙や一りと花と思ひつゝ　舊国

(狂) 竹えの角心もかくやむえつゆ
まおおりゝあ仙のゑれ　計白

(詩) 水仙七字對句　詩礎

墓盞元非千葉種　付雲來
華容要是小蓮花　不染埃

八手の花

葉の岐七八あり形紅葉の葉ふ似ゝ大ひちる姿ゝ
花白く小ちくして黐實のるなり

(俳) つくびふ八手の花や水ぶり　荷風

妙藥 おこりをふる一人此木の葉ゝ六字の名號をゝきつゝのおゝく
せんじゝく數杯飲い志ぶゝくし
てさとぐゝく吐し怒ちおこりおつる

多く呑むをよしとす。実ハ食ふ屋うゝに毒あり

△茶の花 白花 (俳)菓の花や茶も丟旨の極ぬし 文考

(狂)花の香ハ茶よりもずるゝん山吹のかゝてぞ云ときゝ鶯の凡でと 自未

△山茶花 南方州木狀ヨ曰山茶花數種あり。寶珠茶 ○石榴茶 ○海榴茶 花花の中ヨ碑あり ○躅躑茶 ○羨莉茶 ○宮粉茶 ○軟珠茶 皆粉紅色とあり葉ハ各同じゝ云ゝ是ふよりく見生ハ今茶人ゝの賞ハ數種のつぐきなゝ ゝし季寄ふある春の部れつぐきといゝるハ海石榴ゝ椿の字ふ誤ふ

(俳)山茶花や初をたゝく竹屋鬼貫 山茶花や花ゐるもひゝ欲ゝん其角

(狂)つぐきゝもおちぐかゝちをハ名ゝ ゝも淡杠の山茶花のむ 信西

△歸花。狂花といゝ△ゝ△さきゝ△ゝ△ゝ咲。かゝれ。梅 ○櫻。山吹おゝめるい此月三三ゝく事ゝ多きゝゝ

とあり尋常の花とハかゝじけゝく賞ゝるに足ゝらん

(俳)遥昊もゝきゝくいゝ山家 田井 歸花の人ゝも又ゝ戻ゝ三惟

歸花故事 雅櫻宮 冬十一月天皇池中に舟をゝうゝてゝく皇妃ゝゝと遊宴ゝ膳臣酒を献る時櫻花杯中に落けり天皇ゝれをあやしゝゝ是花時かゝゝしていづれの取ゝり来るやゝそ物部長真膳連ゝ勅ありて其花の来る取を求めしゝゝ久ゝば室山ゝ得ゝり天皇其ゝづゝしきをよろこびゝひて即宮の名を雅櫻ゝ名付ゝり是ゝ二ゝ花ゝ日本紀ゝ出ゝり

**寒梅**　十月の季に入るは誤しく月令論者
十二月とも侯等　有

**枇杷の花**　白き花にて八月より咲
はじめ十月頃盛にて
臘月までもある花に葉は四季とも
ふ散らず　実は五月ころ花の頃より
実の熟もるまでの間九十月ごろ
とる故自然とよく熟して味ひよし

(俳)脱肛の厠に枇杷の花見るや鬼貫
ふるまれてぞ花咲せし　枇杷の花　紹鷗

(狂)こりのすにいとをかけてぞびこの花
ぱらぱらとくさるる木がらし　遊野

**室の梅**　室咲　室の温氣をうけ
早く　未時花をさきぬ

(俳)室とおて面白さうな花のさ李四
武系のよれよの好や室の梅　抹雨

**榧の花**　木を烟りとして蚊やり
とするあへふめ弟とい
油をとる物ハいぬうやみて食へ
べうに小木にてよく実を結ぶ

(俳)いつそうめう北堂ふ榧の花　立甫
山ごう榧の花ごやうれ乃朝　山川

**散紅葉**　紅葉散。紅葉散て物と
染く冬くと御傘に出さう

(哥)古今　此川よれをふば流るれく
山のちりげのちりぞ今まさるいし
千載　卵ふいまぞまるまふそ見しう
ども紅ふちりしく此川の冥　頼政

(連)神無月ちりひのころ紅葉ふ肖柏
ちりちりに紅ふふけらくり小宗碩

(俳)戸を叩くもふ云ひの紅葉路外
窓の音せもて二枚を云ぬ紅葉曲巴

(狂)ふしきをばちりしく庭の上ふを
ぬるでぬるふとうやまこれ　貞柳

**麥時**　漢土ハ秋種と下せども
本邦十月ふ下して四月
黄熟に是亦早中晩の異有。
日本後紀稱徳帝大宝二年備ふ勅
ありて天下の百姓ふ大小の麥を
種しむといへども其時とうしなひ

て遂に不成其後嵯峨弘仁十一年冬嗣公に勅ありて今月八月小時〻と是より時と不失といつ

俳 麦蒔や蕪まるふ月ろ一人〻 朝平

## 枯蘆

詩 よハ寒蘆とい

哥 新古今 西行

津の国の難波はすたれハ芦なれや
ねしの枯葉をよ風わたる

あるふくなりふるしな難波江の
あをばましらぬ芦の枯立 成通

難波がた汀の芦ハ枯れてちるこの
枯葉あらいれふるり 二條院讃岐

詞 蘆の下なる芦。阿ぶまく。ふれ芦。ふるれ芦。蘆のうれ芦。をれふれ芦

俳 ひまあれどさむくて人ハ昆陽の芦鬼貫
枯ふるや芦生れちがふ陰つゝみ 支考

狂 草も木もさうふ交すきなきくの
枯ぎるおもしもれ合ふり貞水

## 枯柳

枯柳ハ冬ハ柳と同じ心ぞ
柳のうれなくも枯枝ともよゝり

哥 萬葉 「あをぐれの枯れ柳ハ人なる
人のかつらふすくりえふるるゝな

狂 あをあれバ芽ふハなし茅ぬ 枯柳
枯人ひとりくゝ立てなるゝ 樂自

俳 浮ぬ枯ぬ立や枯柳 五樓

## 落葉

諸木の葉風よちり行くを
いふ。又木の葉ふれちり落る

哥 もいつり「立田川よる流もせきてゝ
ぬるうちりこぶれ枯もいつり

詩 落葉七字對句

風林脱葉・葉山容瘦・雲相稲登・塲野色覧・雲雲映月・鱗〻色・雲相葉飛空・蔵〻聲

哥 秋ぬるとて一葉あぐれなるとゝ山ハ
中く風のまるもきて一ぬ 和泉式部

連　神青　この発句をもて後の歌学ぶ人智蘊
ちくもおれ曲くちめなん　宗砌

俳　一葉ちりいそぐもちりて月欲小　嵐雪
かしの葉木の葉ふよ割る角を井　桃戸

狂　西風のさむいは拾ふ拾ふをうなかけ落葉ふまふと人間ある天王寺　徳存

## 木の葉

△木葉冊　△木葉衣　木の葉
つげはゆふて木ある葉とも
△天象
いとこそれ和哥などおていふ事ゝ俳の季ゝ
出るのいちゝ落るる木ゝ葉をいふ
木葉衣ハ木の葉ふき衣ふきそそくるく
又仙人など木の葉を衣とする故事ゝ
木葉冊ハ冊を一葉といへどゝ立秋の條
に一葉冊の故事ゆゝ考合べ

## 木葉の雨

△木葉時雨　雨のふる
こゝろし　ごとく木葉のちるをいふ

詩　風吹枯木晴天雨　白氏文集
風カ枯木ヲ吹ケバ晴タル空カ雨ノフルヤウナ

連　そめくてちるも時雨の木葉の形　宗祇

俳　寒しある三ふゝもとの木葉ゝ邪　芳室

狂　人なゝで木の葉ふるをなのるそゝ
時雨を八月のゆゝ　貞左

## 朽葉

木の葉の地上ゝ落てくち
なるをいふ　枝ゝ有
なゝ葉のくちゝるをもいふ

哥　夫木　打しまれぬ打葉ふ下れそ
まりて行末ふ吹やる庭の木ゝ　高相

俳　散もせで庭にきゝる打葉ふ　矩州

狂　ちるもなるもなくて打葉ふの口惜や
口惜やくて沙ゝ葉ふもあり　舊徳

## 蕪

又蕪菁ともいふ　俳　嵐山
根のあゝふ　鬼貫

狂　ちゝくもりと人に見せでせをうと
人れいなゝ絲で縛くの美　白圭

## 大根

△大根弱ハ蕪ニ似テ根大ク故大根ト云ふ　蘿蔔

俳　ほこ女が書くるゝ大根ゝ野坡
手ハ付ハまゝ脱のおほ絲ゝ　宗離

## 冬木の櫻

△冬咲　冬ゝ咲くはくるゝ

**雪の下** 花冑月 鴨足草 高物うべし葉を冬も盛り雪の下名ふよって李氏宮

**柊の花** 魔こきハ悪らもき 鬼蔵由 いらとハ苦く葉に刺有故の

## 生類

此部ハ十月一ヶ月の生類をあげめ出ル

**鶯子啼** 非人のよれるかよくきまほいるる 湖中

狂 ゑるハさすぶ法花のかこいぢこ ゑもよこちゝふ志ゝし い夢 井角

## 必用

此部ハ十月一ヶ月の天氣の見やう其外必用の事どのに

**破軍向方**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 夜九ッ 巳ノ方 | 夜八ッ 寅ノ方 | 夜七ッ 卯ノ方 | |
| 朝六ッ 辰ノ方 | 朝五ッ 巳ノ方 | 昼四ッ 午ノ方 | |
| 昼九ッ 未ノ方 | 昼八ッ 申ノ方 | 昼七ッ 酉ノ方 | |
| 暮六ッ 戌ノ方 | 夜五ッ 亥ノ方 | 夜四ッ 子ノ方 | |

**日刻** 戌の日戌の刻亥の日亥の刻事をなすに用ゆる事なるべ

## 出行作事

東方ハ向ひてよし 天道東ハ行月ハ

**樂事** 小春の長閑なるに面を北うして烘々たる日光に

脊をたゝして暖和を得るハかの員暄黄線襖子と昔の詞もむべ

瓶ハ酒をあたゝめ獨酌あるひハ對客炉辺のまとゐハ風寒を志の

ぎてハ春和ゆもやゝ〳〵ず又枯枝ハ

ゝり咲花のけしきめづらしきあり

**天氣** 今月まゝりの西風八十月ハ

西北の風ハ日和をつゝさどる紫乃

雲ゝそバ大風ゝ戌亥の日雲あれバ雨

生ゝ。電あれバ大風あり。今月、酉の

後ハ風吹くゝ東南の風ハ久しゝ

**占候** 虹あれバ不作ふて五穀貴し

。初のきのゝねにあれバ

その冬大ふ寒ゝ。十五日晴れハ

冬ゝ大ふあたゝかなり申の日寒

うゝざれバ暴死多し。○東の雲たてバ雨ふらもひあり

**養生** 此月暖帽といでく事なれ腦を冷すべし 眩暈の病なし。みぐるふ針灸をうゝげ血滿て濕滯ぞ。す垂 眠西方に向ふ。しかるゝ後ねゝをてゝむ事をもちゐるべし

**衣服式** 當月より綿入を著るべし。移菊表紫裏青 黃紅葉表裏藤

**生花式正**

○残菊。茶花。寒葵。○限笹。霜ふり五葉。○寒竹。かゝま松。唐松。大山樒。つゝハの花。ゆつり葉

○此月紅葉の仕ゆう。梨みゝ。たくあん。香の物漬ゆう秘傳ゝ。ぞく。梔子。木芙蓉ゝ種蒔の品ゝく其外當月用意の品并小養生の仕ゆう等委ゝく日本歳時記。知術全書等ゝ出故略ゝ

# 十月飲食並料理献立

**禁物** 山椒と多く食へハ血脉と破る。○ふら〻食へハ淫多く出る。○霜ふ枯ふる菜を食へハ面のいろ〻損ぞとゝる

**好物** 今月羊を食して益あり。○雀肉 冬三月これを食へハ陽道をたこゝ。ふゝ。むゝる。ゝ人をして

**料理**

**汁** 大〻うけ。かき。ぜうり

つぶ貝のうけ。小まゝ。

小花ゑび。まゝ。ものゝ

やうたぶ。きくらげ。ふきのとう。やたぶ。ぜうれん

**清汁** 清たけ。かゝこ。午房

**膾** 鯛・せんまい。大らん・ぜうが。きさご・おまと。大らん・ぜうが。ゝう・きんゝ

ふな細つくり　ぼらひら作り
うど　本くけ　いろは　鯉こく
白うぶ・うぐい　鯉こく
鯉仕立いろは

## 差味

なまこ　糸こく
本くけ　せうがど
かた・鯛・えびろそ
あげ　きらいろは
えび・こうづ
本くけ　うんだま

けがい・むしがき
せうが・うんだま

かき　水と五分して
大こん・いそくけ
ちくびこそ

## 煮物

鴨・あらくけ　屠
ひらくけ
鯉べう

大根・こうみ
松くけ・こうみ
うすくつ　也

きんこ　細つくり
きすご　ひらめ
ゆりね　ごぼなう

あるたき　あらせ竹
ぎんなん・本くけ
ムらだまう　こくび

あのしろ　せごし
むして
えろき　かづら
しいたこそ

## 和會物

ぎうだう　もにして
せんごぼう
こうがしこそ

さごあ・うど
さんせうこそ

いせえび・鯉こく
みぬさ　ゐる
もそこそ

たこ　ぎんなん
本くけ　ちくびこそ

ムしがい　ぎんなん
きあへ

しいたこ
こくるる
ちくぎんなう

## 吸物

大こん
鴨　せう
ぎんなん

赤こい・茶せんぶ　ねぎ
かくこ　きうり

かしこ　あげこ
ちう　ねぎ
せうが

むうぶ
あらびうづ
ねぎあへ

## 精進

## 汁

ちくぜん　ごぼう
せうが　きる

鯉こく
鯉こく

二ぶ　かつ
ぼう　松くけ

長いもこん
とうが

大こん　小角
おぼうこん

やたふ・
ちさ

わうが
ゆず

あげこん
かくこ　ちくけ

## 清汁

ゆりね
ごぼう

小松ばし
のうたくこん

## 膾

実くるま
みる

松茸
ぶん豆腐

赤えど
ちへぜんど
のう

大こん・ふんどん
あげこん・鯉こく
こう・ぐうが

こうがくき
ごぼうこん
ゆず

くるん芋・きくな
いりのこんにゃく・ふきの

差時
さしみ・ざあんぼう・まるふかぎり・本くげ・くり
えのいも・桃・くり・栗
そう栗・せんごぼう・ゆで

煮物
にもの・ほふ・ちくび
ほそ竹のこ・ひらそら・ほそ・よめな・ふみくけ

和會物
へうのあへもの・ぎんなん・ぎくけ・にんじん・ちそえ

うせぎ・ぐるえ・ぬけ・せり
くう・うど・柿のあへ
うぎ・うんぎく・きうり

吸物
すまし・くけ・うすくず・ちくび
よせぎんなん・やたぐり・こーやく

時物
魚
うるえ・かれい・かます・たら・さより・うづま・きすご

青物
あをもの・ぶら・たうん・にんじん・ぶり・ぶり・くるま・ぶり・ぶり・くるま

きんかん・ちくび・ぎんなん・ちくび・牛房・めうど・ゆ・ざくろ
ろくもんさう・ゆ・ざくろ

防風・ぎうさういも
ぐんぐん・ぎあんぐう